

## 平成二十六年入学式式辞

今年はこのほか寒さの厳しい冬でしたが、先月下旬から暖かくなり桜も今月に入ると一挙に開花し、国際園芸アカデミーのキャンパスでは新たな花が次々と咲き、皆さんの入学を迎えてくれています。

ここに、本校に入学されました二十名の皆さん、ご入学おめでとうございます。

ご参列の保護者の方々にも、心よりお祝いを申し上げます。

また、この度はご多忙にもかかわらず、岐阜県議会議員の先生方をはじめ、可児市長様ほか、多数のご来賓の方々のご臨席を賜り、誠にありがとうございます。皆様方には平素から本校の教育に多大なご支援、ご協力を賜っておりますことに、この場をお借りまして改めて厚く御礼申し上げます。

さて、国際園芸アカデミーは昨年度で開校十周年を終え、新たな次ぎの段階に入ろうとしています。これまでの十年間は暗中模索のなか、実務者を養成するための教育機関としてのカリキュラムと教育環境の整備に邁進してまいりました。これらの学ぶ環境が整った今、これまで当校で学んで業界で活躍している卒業生と共に園芸業界の発展に貢献しなければならない段階に入っています。本校の開学以来の教育理念と使命は、「花と緑の産業と文化の発展に寄与し、健康で心豊かな生活を創造できる専門的・総合的な知識と技術を修得した人材の育成」であり、また、マイスター科の育成すべき人材像に「匠の技術を持つ実務者として、花と緑の産業を現場で支える担い手」とあります。まさに教育機関と園芸業界が一体となり連携を深める段階に入ったということです。この通常国会でも、花き振興法が議員立法として成立されることになっています。この法律では、その目的に「花きに関する伝統と文化が国民の生活に深く浸透し、国民の心豊かな生活の実現に重要な役割を担っていることに鑑み、花き産業および花き文化の振興を図るため」とうたっています。まさにこの目的を担う人材の養成が当校の使命そのものです。

本校での学びの特徴は、その目標達成のため、分化した狭い専門分野だけでなく、植物を育てる生産分野、植物を飾る装飾分野、植物を植える造園緑化分野の3分野を広く学んだうえでそれぞれの分野を深く極めることにあります。

このような学びを通し、時代が求める豊かな感性と柔軟な発想をもつ、専門

の枠だけにとどまらない応用力のある人材の育成を目指してきました。

皆さんは、このような学びを通し、花と緑のもつ役割を体得し、それを社会にしっかりと伝えられるようになっていただきたいと思っています。さらには目標を同じくする先輩や仲間と交流し、様々な分野の先生方と議論し、自分を磨いてください。

ここで、これからこのキャンパスで学ぶにあたり、先人の残されたある言葉を紹介したいと思います。

それは、「いまやらねばいつできる、わしがやらねばたれがやる」という言葉です。明治から昭和にかけて、亡くなる百七歳まで現役の彫刻家だった平櫛田中（ひらくしでんちゆう）によるものです。毎日、仕事に打ち込みながらこの言葉を唱えていたと言われています。東京芸術大学の前身、東京美術学校を創立した岡倉天心に師事し、有名な高村光雲を彫刻の師匠としていました。彼は、師匠の教えに従い、器用を嫌ったことでも知られています。「六十、七十は鼻たれ小僧。男ざかりは百からだ」と言いながら、百七歳の天寿を全うするまで、ひたすら愚直に作品を作り続けた人です。彫刻の道は生涯修行と受け止め、全身全霊をその道に打ち込んでこられたのです。私は、皆さんには器用に、また要領よく生きてほしいとは思いません。平櫛田中のように愚直にこつこつと積み重ね技術や知識を磨いていってほしいと思っています。

この言葉を胸に、今を大切に時間を無駄にせず勉学に励んで下さい。その学びを私たち教職員が一丸となりサポートして行きますので、学生の皆さんは悔いのない学生生活を過ごしてください。また、保護者の皆様には安心して私たちにお任せください。今日、ご臨席いただきましたご来賓の皆様におかれましてはこれまでにもましてご支援、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

最後に、新入生の皆さん一人ひとりが心身ともに健康で、新たな友人と出会い、語らい、有意義な学生生活を全うされること切に願ひ、私の式辞といたします。

平成二十六年四月吉日

岐阜県立国際園芸アカデミー 学長 上田善弘